

希望と納得にもとづく公正で民主的な人事異動の確立を！

介護・保育・健康、指導の継続性など、切実な事情を尊重せよ

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合

ホームページ

府教委2027年度人事異動方針を発表

府教委は、8月24日の校長会で、2027年度の「人事取扱要領」等について説明をおこないました。府教委は、「人事取扱要領」の「変更はない」、「人事調書」について様式変更は無いが、教職員、管理職の負担軽減のため「データでの提出に変更する」と説明しました。大障教からは、拙速な提出方法の変更やデータ不備等人事調書作成における負担増につながらないか、加えて、面談における丁寧なやりとりをもとめました。大障教は引き続き、障害児教育の専門性の低下や、教職員の業務負担増につながる人事異動、人事を通じた教職員の管理強化には反対の立場を貫き、「本人の希望と納得にもとづく人事」「公正・民主的な人事」を求めてとりくみます。

1. 2027年度「人事調書」提出方法の変更について

これまでと大きく違うのは、本人が作成した「人事調書」がデータで府教委に提出されることになる点です。校長との人事面談を経て、「人事調書」の内容を変更する場合は本人の意向をふまえて本人が修正します。またデータで提出するため、予期せぬ不備が生じるのではという懸念について、府教委は「面談時に印刷した調書をお互いに確認してもらう」と説明しました。いずれの点も、学校長による丁寧な本人意向の確認とやりとりが重要です。今回の変更によって、さらなる負担増や問題が生じることにならないよう大障教としてもとめていきます。

「人事調書」の提出方法における 今回の府教委説明

- エクセルデータでの提出とし、「マイクロソフトフォームズ」かメールとする（学校判断）。
- エクセルデータには、ロックがかかり、編集は本人にしかできない。
- 府教委へもデータで提出する。
- ※【特記事項】に記入しきれない場合は、これまでどおり「別紙」で出してもらってかまわない。ただしデータではなく用紙での提出とする。

2. 「人事調書」記入にあたっての注意事項

「人事調書」は、人事異動を前提に作成されています。それを踏まえて記入しましょう。特記事項には、「異動希望はない」「肢体不自由校以外への異動は希望しない」など、自分の意思を明確に記入しましょう。特記事項に書き切れない場合、「別紙にて添付します」と記入し、添付書おこないましょう。

3. 人事ヒアリングについて

校長・准校長による本人ヒアリングでは、あいまいな言い方は避け、自分の意思を明確に校長・准校長に伝えましょう。校長・准校長に伝えましょう。

4. 人事異動に関する大障教の基本的考え

直轄強制人事異動のねらいは、教育行政が、学校や教職員への管理と支配をいっそう強め、政府や府教委が決めた教育政策を学校に徹底することにあると大障教は考えています。そもそも人事異動とは、ゆきとどいた教育を推進するためにおこなうべきものです。人事異動を特定の施策推進や教職員の管理統制・教職員削減・退職の強要などに利用することは許されません。異動対象者の年限基準短縮に伴い、府立支援学校では、教職員の入れ替わりが早まり、引継ぎが十分にできない中で

書記局の ひよこじゅ

みなさん、約1ヶ月の夏休みをどのように過ごされましたでしょうか？

夏休み前は、あれもこれもと考えを巡らせ、無尽蔵な時間があるかのように感じますが、毎年8月末になると定型文のように「夏休みよ、あと1週間延びてくれえ」と願う自分がいます（笑）。自分の時間や家族・恋人・友だちとの時間等様々な時間を過ごす中で、みなさんの心と体のリフレッシュ＆充電のきっかけになっていたらと願います。

私が子どもの頃は、夏休み期間には毎日公園で野球や鬼ごっこをして遊び回り、2学期は真っ黒に日焼けした姿で友だちと再会するという風景が当たり前でした。しかし、近年の夏は、40℃以上の酷暑日やゲリラ豪雨等の異常気象により外出を控えるを得ず、自分たちで「命」を守らなければいけない「危険な夏」になっています。

2026年夏は、台風9号による沖縄・先島諸島の大規模停電、M7.1の熊本地震、記録的な大雨の千葉県や北陸地方の豪雨、1ヶ月で10個の台風が発生する60年ぶりの台風ラッシュ等、目と耳を疑うような災害が日本全国で頻発しました。今現在も避難生活が続く中、災害で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被害に遭われた皆様に心からお見舞い申し上げます。

子どもたちも、この夏は楽しい経験・初めての経験・怖い経験等様々な夏を過ごしていることと思います。加えて、学校が始まることを楽しみにしている子、新たな生活リズムや集団場面への参加に不安を抱えている子もいます。どの子も安全・安心に過ごせるように見守り支えながら、2学期をぼちぼちスタートさせていきましょう。

大阪府立障害児学校教職員組合 大阪市天王寺区東高津町7-11 府教育会館704号 TEL 06-6765-8904 FAX 06-6765-8905

変える力は私たちの手の中に

北河内ブロック分会合同教研

7月31日～8月1日に、北河内ブロック分会合同教研を行いました。今年で13回目となり、各分会（交野支援、光陽支援、四條畷校、思斉支援、寝屋川支援、枚方支援、守口支援など）から23人が参加しました。

しんどさ、悩みも抱えつつ、それでも連綿と仲間とともに

一日目の学習会①は、「受け継ぐ分會よりがよい・悩み・これからのこと」をテーマに交流しました。まずは各分会長より、分会長を引き受けた時のこと、やりがい、しんどさ、日頃の活動や思いを共有しました。各分会の参加者からも「加入前は組合に關して実感がなかったが、ぼーっとしてても前進しないことがわかるようになった。特に、学校建設の要求は他人事ではない」「組合で人とのつながりが増えて心強い」「もっとこれまで



日頃の思いや意見をお互いに出し合いました

『困った』を出し合おう」をテーマに、組合活動に限らず、日頃モヤモヤ感じていることをざっくばらんに出し合いました。チームティーチングや子どもの捉え方に関する悩みに対して、それぞれが自分の職場や経験に引き寄せて考え、次々と発言が続きました。また、うまくいかないと感じることの背景にある、さまざまな要因にも目を向けて意見が交わされました。



教員人生を振り返る田崎さん

誰かが変えてくれるのを待つのはやめよう

二日目の学習会③は、大障教特別執行委員の田崎尚弘さんからお話を聞きました。「教員人生を振り返って」と題して、「なぜ教師になろうと思ったのか」「障害児教育との出会い」「先輩から学んだこと」「教師としての変化」などが語られました。

田崎さんは「青年教師のころは、どこかで『立派な教師にならなければ』という力みがあった。自信が無く同年代の同僚との比較で自分を捉えていた」と振り返りました。そんな中で感銘を受け、くり返し読んでいた詩や書物の一節を紹介し、自分を奮い立たせてきたこと、先輩の「障害の重たい子は学校の宝」という言葉をもとに、子どもの権利保障や民主的社會を作る観点を得てきたことを語りました。「無念が歴史の扉を開く」という仲間の言葉を引用し「無念の思いが要求と運動につながる。優生思想を克服する社會をどう作っていくか」と話しました。

また、子どもたちに文化を伝える授業をしようと、まず自身が本物の文化を学ぶ機会を持ったこと、同僚や保護者に助けを得ながら取り組みを作ったことを紹介し、「子どもの課題から授業を作ると、できるかできないかの能力の視点のみになる。文化の獲得は手段ではなく目的となり得る」と授業づくりの大切な観点に触れました。

また、北河内のこれまでの運動について、2008年に当時なかなか動かなかった学校建設が決まったとき、「誰かが変えてくれるのを待つのはやめよう。変える力は自分の手の中にある」と、要求運動への確信を得たことを語りました。最後に、「組合に入って仲間を得よう、一緒に成長しよう。あなたは何を变えたいですか?」と投げかけて締めくくられました。

参加者の感想

- 大先輩方のお話やエールを受けて、若い力を感じて、できることをしっかりやって、バトンをつないでいこうと思いました。
- 学校・世代を越えてお話を聞けてよかったです。分会が受け継がれてきた過程を聞き、自分ができることはしていきたいなと思いました。
- 学び続ける、人に伝える、考えを文字に起こす、すべてが教員に必要な素地だと改めて感じました。
- 最近いろいろ悩むことが多くあったので、自分を見つめ直したり、今まで自分がやってきたことは間違いではないか?と考える良い機会となりました。

ひとりひとりが大切にされる社會を

教育のつどい2026



8月21日、名古屋で「教育のつどい2026」が開催されました。開幕にあたり、「どうれっしゃがやってきた」の作曲者藤村さんの指揮のもと、合唱企画の平和を願う歌声で会場が包まれました。

記念講演は同志社大学の岡野八代さんが「政治をアッ

プデートする～憲法、ジェンダー、個人の尊厳から～」というテーマで、無償労働の「ケア」に焦点を当ててお話しされました。「人は誕生によってそれぞれの世界が始まり、誰かのために生きるのではない。世の中には誰かの手を借りなければ生きていけない人が必ず

居て、その背景にはケアを軽視してきた社會がある。そんな複雑な社會構造や歴史を読み解きつつ、ひとりひとりが大切にされる社會をつくるのだ」という岡野さんの軽妙で明るい語り口に聞き入りました。

(教文部 樋口真弓)

くりしました。資料にはお話の中で紹介された詩や文章だけでなく、田崎さんが藤井寺支援分会ニュースに執筆された2年分のコラム集もあり、読み応えのある内容に参加者からは「学び続ける姿勢が大事だと伝わってきた」などの感想が寄せられました。

今また深刻な「過大・過密」など困難な状況に向き合う私たちにとって、仲間とのつながりを実感し、子どもたちのために何ができるかと考え合う、充実した2日間となりました。

(枚方支援分会 林陽子)